

人間が作る「物語」の真相

和洋国府台女子中学校 三年 小林 優里花

戦争と動物の虐殺の共通点は何だろうか。私は山極寿一さんの「作られた『物語』を超えて」という論説文を読んで、昨年自分が書いたヒヨコの殺処分の話と共通する点があると考えた。山極さんは、ゴリラのドラミングの誤解について書いていた。ドラミングは呼びかけの意味があるが、映画や昔の人たちが語った「物語」のせいで怖いもの、戦いの宣言というイメージが付いた。一方ヒヨコはゴリラとは反対の「物語」である。モフモフで可愛らしいイメージで守るべき存在という印象があるが、実際は卵が産めない雄のヒヨコは年間約六十億羽も当然のように殺処分されているし、生きのびて育てられた食用鶏の30%が品種改良により歩行困難に陥っているなど、悲惨な現状なのだ。私は、その悲惨な出来事を隠す事は、周りに良い印象しか与えようとしない「物語」の一環だと考える。

この二つの「物語」には共通する点がある。それは人が動物の真の状態を自分達の都合で見ようとしないという点だ。例えば、マウンテンゴリラは世界に千頭余りしかいない。森林伐採による生息地の減少や内戦、密猟などが行われているからで、いわば人間のせいだ。私は知識を身に付け、自分達人間の営みで他の生物が危うい状態なのを深く理解する事が出来れば、ゴリラは絶滅危惧種ではなくなると考える。ヒヨコの殺処分も知恵をしぼれば、逆に「物語」通り守るべき小さな命として扱う方法も見つかると考えられる。

人間は、身を守るため、自分達の都合のために虐殺を選ぶ。例えば、ユダヤ人虐殺、ホロコーストである。ホロコーストはキリスト教徒の救世主、イエス・キリストを認めないユダヤ人を「劣った人種」、アーリア人を「優れた人種」という思想により、ヒトラーが主体になって起きた約六百万人が殺された事件である。また虐殺ではないが、今起きているロシアとウクライナの戦争も同じだ。もともとロシアとウクライナは同じ国で、分かれた後も兄弟のような間柄だった。しかしNATO、要するにロシアを敵と見ている組織に

ウクライナが接近するなど、ウクライナはあまりロシアの言う事を聞かなくなった。そこでロシアは、自分達の言う事を聞くようにするために攻撃を始めた。だがウクライナも一つの国であるためロシアを追い返そうとしている。それが戦争になったのだ。そして今もたくさんの方が亡くなっている。

私はこの虐殺や戦争にも、「物語」があると思う。ホロコーストでは、アーリア人がユダヤ人を「劣った人種」、自身を「優れた人種」と言っていたが、それは、自分達を理解できない人は敵、理解できる人は味方とみなしている。つまり、アーリア人が作り出した、自分勝手な「物語」である。ロシアとウクライナも同じだ。一方的な理由を攻める事の正当な根拠としている。つまり、ロシアは言う事を聞かない自己中心的な国という「物語」でウクライナを捉えている。それらは山極さんの言うように「物語」を真に受け、反対側に立って自分たちを眺めて見る事をしないから起きる事である。だが、逆に言うと、「物語」をそのまま受け止めず、反対側に立って自分たちを眺める事さえ出来れば、虐殺や戦争は無くす事が出来るという事だ。お互いを理解する事が出来たら、きっと世界はもっと平和になるだろう。

以上のように戦争と動物の虐殺は、理解が足りず、自分の都合だけでものを判断するから起こる事だと考えた。それらを起こさないためにはものの見方を変える事が大切である。私は今まで、勉強は自分が好きな職に就くためにあるとばかり考えていたが、勉強し知識を付ければ、見える世界がとても広がる事を知った。常日頃から情報を取り入れ、知識を身に付け、世界の出来事を「物語」としてではなく、「ジブンゴト化」し、見える世界を広くしていきたい。

参考文献「国語3」（光村図書）

山極寿一「作られた『物語』を超えて」